

ある約束の話、或いはただ一つの後悔の話

鎮竹燐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブルーアーカイブ最終章のネタバレを含みます閲覧の際はお気をつけください。

とある先生の思い出話。或いは終演

3 / 16 完結させました。

3 / 18 番外編の投稿を始めました。

目次

とある方舟にて、或いはもう果たせない約束について	1
とある教室にて、或いは少し違う変わらないぬくもりについて。	4
とある未来の話、或いはある生徒から恩師への宣言	9
番外編その1 水着について	16
番外編その2 お疲れプレ先生	23
番外編その3 大切な確認作業	29

とある方舟にて、或いはもう果たせない約束について

先生……これからも、■■■■をあつためてくださいね

■■■■との約束

崩壊する方舟、ある生徒がそこから脱出したのを確認した途端自身の肉体に致命的なダメージが入ったのを自覚した。

うまく口を動かせず前も見えず、重い体でここまで来れたのは自身の代わりに目と耳、そして足になってくれた彼女がいてくれたからである。

そうして彼女の事を思い浮かべた時、ある事を思い出した。

あれはいつの事だったか。

確か冬の寒さに負けないよう私を温めるために■■■■が教室にこたつを出したのが始まりであったはずだ。とっておきであると言つて出したこたつに2人で入りながら会話を重ねる。伸ばした足が当たってしまったことに気恥ずかしくなりながら、そのあたたかさに包まれていた。

どちらが先に寝てしまったのか、気づけば時間はかなり経っていた。恐ろしいこたつの魔力に取りつかれ■■■■ちゃんねるを毎回寝落ちで中断するわけにはいけない。そのためこたつを封印することに決めたのだ。

最後にポツリと呟かれた一言は彼女もこたつを封印することを名残惜しいと感じているようだった。

春の訪れを感じる季節になってきた頃。

ある日の■■■■ちやんねるにて、何か重いものを引きずった後とみかんの皮の端っこを発見した。彼女の手を握りその手の温度を確認する。

急に両手を握りしめた事に対して微かに頬を染めていた■■■■だったが、発見した証拠と手のあたたかさから私が何に気づいたのか察したようであった。

前回しようとは言ったものの寒い日が続き我慢できずに出しっぱにしていたようだ。こたつの魔力には抗えなかったのだと、はにかむ■■■■の手はどんどん温かくなっているように感じる。そう言うのと、ずっと手を握りしめてくるからだ、私がそばにいればこたついらすだと言う■■■■。

そうだ、この後に彼女と約束したのだ。

これからも、■■■■をあつためるのだと。

頬を染め、こちらを見上げ、両手を握る彼女と約束したのだ。

指先一つ動かす事が出来なかったあの時よりも筋肉が落ち、包帯を指先まで巻き、細くなつてしまった手だと自覚する。もはや何も見えず聞こえず、動かせない体。生徒たちはきつと大丈夫だ。自分ならば必ずやり遂げるだろう。仮に色彩の嚮導者にならず、別の自分がこのように生徒を託しにきてくれたのであれば自分は必ず応えるのだから。

ああ、でも一つだけ、たった一つだけ後悔があるのだとしたら、すこし硬くて大きくてあたたかい手だと笑つてくれた彼女との約束を

骨と皮だけであるが故に硬く、大きくとも細く、冷たい手になった己は叶えることが出来ない。それが、とても、すごく、悔しい。

■■■■、■■■■ナ、■■■■ロナ、アロナ。我が愛しき生徒よ。先生としての始まりから最後の最期まで共にいてくれた相棒よ。君の手をもう一度握りしめたかった。あたたかいのだと笑い合いたかった。

でも、もう私にはできないのだ。

崩れ壊れていく体で笑い、祈る。

私の、私たちの生徒たちに。

そしてなによりも約束を果たせなかったアロナへと。

君の君たちの未来が、その生が、幸多からんことをわたしは

とある教室にて、或いは少し違う変わらないぬくもりについて。

D・U・シラトリ区の復旧作業も無事に終わり騒がしいキヴオトスに戻ってきたころ先生はある教室にいた。

何個か置いてある机と椅子。崩れた壁から見える外の景色は青く透き通っている。かつては1人の姿しか確認することが出来なかったその教室には現在2人いる。

1人は先生の超有能なスーパーアロナちゃんこと、アロナ。

もう1人はかつては敵対していたが、とある先生から託されたことでこちらに来たシステムの箱メインOSのA・R・O・N・Aこと、プラナ。

違う世界線の同一存在である2人だが、その容姿は異なる。

アロナは青い制服、白いスカート、白い靴、青い髪ショートにしておりまるでこの教室そのものといった容姿をしている。

プラナは黒い制服、黒いスカート、黒い靴、白い髪は腰まで伸ばしたロングでありその姿からは夜を連想する。

2人の仲は至って良好。アロナは自身をプラナの姉であるといい、お姉ちゃんぶろうしているがプラナはアロナを先輩と呼び慕っているように見える。

お姉ちゃん呼びは達成できていないが2人で夜の教室から見える星についてお喋りしている姿を見たことがあるので意識せずともアロナはプラナの姉であると言えるのかもしれない。

それは置いておいて。
先生が教室に入るとアロナもプラナもいた。
しかし、アロナは机で寝てしまっておりプラナはそんなアロナを起
こそうとしているようだった。
程なくしてプラナがこちらに気づく。

「こんにちは、先生。お仕事を始める時間でしょうか。」

アロナ先輩は現在寝ています。起こされますか。」

” こんにちは、プラナ。”

” 大丈夫だよ。こここのところ手を借りっぱなしだったからね。

”

” ゆっくり寝かしておこう。”

「そうですね。」

それでは、どういったお仕事から始めますか先生。」

” 実は仕事が終わって時間ができてね。”

” 生徒たちからのモモトークも無いし、買い物とかの予定もないか
ら

様子を見にきたんだ。”

「……成程。理解しました。先生は今、特にやるべきことがなく

暇なのでですね。」

その通りである。普段の仕事量からは考えることが手がないほど
の自由時間を手に入れてしまった為、手持ち無沙汰になっていたの
だ。

いつもであればこんな時は、モモトークから連絡の来た生徒の所へ
向かい買い物や特訓、相談に乗るなどしているのだが今日はそれも無
い。

どうしようかと考えた時に、ふとアロナたちのところへ顔を出そうと思ったのだ。

”最近までは忙しかったからね。”

”久々の自由時間をどう使うか全く考えていなかったのさ。”

そう言っただけ寝ているアロナの頭を撫でる。起こさないように、寝ているせいか少しだけ乱れてしまっている髪を整えるように、優しく撫でる。

いい夢を見ているのか顔を緩ませて、うひひなんて言うアロナに思わず笑みがこぼれる。

そうしてプラナの方を見ると、プラナは寝ているアロナの頭を撫でる私の手に注目していることに気づいた。

”どうしたの?”

アロナの頭を最後に一撫でしてからこちらをじっと見つめるプラナに近寄る。撫でていた時に視線を感じたからもしかして撫でてほしいのかもしれない。そう考えてプラナの頭に手を伸ばす。抵抗する様子は見られないので、頭を撫でる。寝ているアロナを起こさないように撫でた時とは違い、少し力を込めてそれでも優しく頭を撫でる。

その時後ろでガタツと音がした。

どうやらアロナが起きたようだ、確認するために後ろを振り向こうとする。手がプラナの頭から微かに離れる。

次の瞬間、私の手はプラナの両手に捕まっていた。
そうしてプラナに導かれ、頬に手を添える。

アロナの抗議する声が聞こえる。

しかしプラナはそんなもの聞こえないとばかりに手に擦り寄っている。

「あーっ!!!なにしてるんですか!!?それはズルですよ!!?」

ズルっここですよプラナちゃん!!?」

”まあまあ、少し落ち着いて。”

「先生も先生です!!?この状況を楽しんでいるのがまるわかりです

!

そんなニマニマしてないで離れてください!!?」

そうやってアロナと戯れていると手にプラナの温かさとは違う感触と冷たさを感じた。そうして聞こえてくるくぐもった声。ヒートアップしていたアロナも気づいたようだ。

「……………あつたかい…。……………ちゃんと……………あつたかい…。」

ぽろぽろと大粒の涙をこぼしながら、けしてけっして離さないのだといわんばかりに強く、それでいて壊れ物を扱うかのように丁寧に、確かめるように手に縋り付いているプラナ。

オロオロとどうしたらいいか分からずとも、泣いているプラナを慰めるように声をかけるアロナを横目に見ながら、とある人物を思い出

す。

骨と皮しかのないような薄さの腕と指

ミイラのように包帯を指先までぐるぐると巻き

血や煤、埃などのせいかボロボロになって汚れた大人のカード

ああ、プレナパテス。生徒たちの為に戦い続けた我が同僚よ。

君もきつと約束していたのではないだろうか。

その手で彼女にぬくもりを与える機会を望んでいたのではないだろうか。

もはや見る影も無い己の姿に、筆舌に尽くしがたい感情を覚えたのではないだろうか。

アロナと2人でプラナを抱きしめながら決意する。

己の生徒たちを、託された生徒たちを、大事な大切な生徒たちを。

決して悲しませないのだと。幸せにするのだと。

あの応えを違えるようなことにはしないのだと。

そして願うのだ。

誇り高き先生よ。

どうか君にも幸多からん事をと

とある未来の話、或いはある生徒から恩師への宣言

こんにちは、先生。

お元気ですか？私は今日も元気です。

先生がこちらの世界で己に課した使命をまっとうされた日から、なんと10年も経過しました。

先生が再び立ち上がったあの日や、こちらの世界へ来た日と時間の流れを比べると恐ろしく早く感じています。

色々とお伝えしたいことやお話したいこともありますが、まずなによりも伝えるべきことから報告します。

この度、私プラナとアロナ先輩はシツテムの箱内部の仮想教室から此方の現実世界へと足を踏み出しました。

失踪していた連邦生徒会長の発見や、先生が払ってきた大人のカードの強烈な代償、キヴォトスを襲う過去類を見ない程の大きな事件など。全てを言葉で伝えるのに一日では時間が到底足りないほどの事がありました。それはまた後ほど。

大切なのは、私たちがこの世界に確かに存在しているということです。

かつての様な戦闘指揮のサポートはできませんが、先生や生徒さん達と共に数多くの戦いを経験してきた私たちですのでそこは心配あ

りません。

シャーレの先生用のオフィスの机に毎日山になっている書類を捌く作業も始めはこの肉体の動かし方に慣れず、書類を完成させるのが大幅に遅れてしまうなどしましたが、今は大丈夫です。むしろ先生よりも早くできています。

あの時、私がこうして側に居れば先生の顔をパンダのようにせずんだのでしょうか。私は■■■■：くくくく（何度も書いては消した様な跡）

それはそれとして現在、私としてはこの世界に戸籍を作る際に連邦生徒会長とアロナ先輩、そして私による三姉妹であると登録されてしまったことの方が心配です。連邦生徒会長は笑っているだけです。アロナ先輩は、これで名実ともにお姉ちゃんになったと大変満足そうです。姉として認めていないわけでは無いのですが、本人がそれに一切気づいていないので当分は先輩呼びを継続していこうと思います。

話が逸れてしまいました。反省です。

かつてまだ、子供であった生徒さん達も10年の月日を得て立派な大人になりました。最後の戦いを経て自身の将来について考えられた生徒さんたちは先生や友人、仲間たちと相談を重ねたりしながら自身の夢の為に日々精進しているようです。

中には長い自分探しの旅を終えてあの時の先生のような大人になりたいのだと決意し、実際に「先生」になった生徒さんもいるんですよ。大人になり「先生」としての資格も得て、そして先生に自身の同僚として迎え入れて貰えたことを実感したとたんに感極まったのか涙を流し始めてしまったので、お祝いに集まった全員で涙にまみれたお祝いパーティーが始まってしまったのです。最後には全員で写真も

撮りました。皆さん泣きすぎたせいか目元が腫れていたんですがそれでも写っている全員が笑顔のいい写真です。

■　　〳〵
■　　〳〵
■　　〳〵
■　　〳〵
■　　〳〵

(真つ黒になって何が書いてあるか見えない)

先生、ほんとうはあなたとも一緒にこの景色を見たかった。

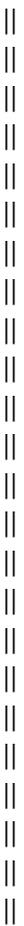
先生も、自分同士で生徒を祝いながら呑んで見たかったなど。

あまり交流がなかったと言える私ですら込み上げるものがあるのですから、先生としては言葉ではいいあらわせないほどに喜ばれるのでしょうか。

まだ、先生の所は行けません。

私は見たいことが、聞きたいことが、言いたいことが、知りたいことが、やりたい事が沢山たくさんあるからです。

だからわたしは、……………■ ■ ■ ■ ■



数多の事件、事故を乗り越えその度に改修、改装、改造を行った結果キヴォトス一高いビルになってしまったシャーレのオフィス。

その屋上に1人の生徒と先生がいた。

屋上の中心部は黒く焦げている。

生徒は手紙を、先生は紙飛行機を燃やした様だった。

” いいの？最後まで書かなくて”

” 沢山悩んで納得できなくて書き直していたんでしょ？”

「……………アロナ先輩ですか。」

” 責めないであげてね。”

「プリナちゃんが毎日徹夜して一心不乱に何か書いているんです。そろそろあの日だと考えると止めづらくて。でもずっと書いては消してを繰り返した後、朝日を見ると手を止めて仕事に行っちゃうからすごく心配で…。先生、私はどうしたらいいですか?!」

” って頭を悩ませていたから。”

” 後で顔を見せてあげて。今はスッキリしたように見えるから。”

「……………反省。同じ部屋ですから筒抜けでしたか。」

……………イチゴミルクも持っていくことにします。」

” うん、そうするといい。”

”それで、くどいようだけどいいの?”

「……………」

”……………”

「……正直言えば、納得できたわけではありません。」

「まだ伝えたいことが、言いたいことが、書きたいことが沢山ありますから。」

「今でもたまに考えるときがありますし、夢にも見ます。」

本当にあれでよかったのかと。

果たせなかった約束を思い出して泣いてしまいましたし、あの時の手の冷たさは私の心に残ってしまっています。」

”……………”

「それでもこう考えるときもあります。」

あれでよかったのだと。

少し違うけど同じあたたかさを今度は守りきれました。

先生だけではない様々な暖かさを知りました。」

「乗り越えることができたとは言えません。」

忘れることもできません。

それでも一つの決着をつけたと思っています。」

”…その決着って?”

「今、貴方がこの場でこうしていることです先生。」

「私たちの世界は当時の貴方達の世界よりも進んでいたと言えるでしょう。ですが貴方達は、いえ、私たちはそれらを乗り越えました。」

私の経験からなる数秒先の最悪の未来は、決して起こり得なくなりま
した。こうして10年の時が過ぎたのが何にも勝る証拠です。
ですから、先生」

「貴方はA・R・N・O・Aの先生ではなく、プラナの先生になっ
たんです。」

「これが私の思う「決着」です。」

”……そっか。なら一つ教えて欲しいな。”

” プラナはこれからどうする? ”

「決まっています。この世界を見て回るんです。」

私の、私たちの物語はまだ続くのですから。」

いつか、また、先生に会った時に沢山たくさん話をする為に」

「……………?、疑問。先生なぜ顔を背けるのですか。先生?」

”子供、いや娘かな？成長ははやいなあ？” ”もう年かな？”

いきなり何を言ってるんですか。行きますよ。手紙を燃やした勢いが思ってたよりも強かったせいかな色々な人達から推定お叱りの連絡が来れます。

なにより明日他の生徒さん達のお祝いパーティーがあるんですから。今のうちにある程度用意しておかないと、また美食家の皆さんに食料品全て食べ尽くされちゃいますよ」

先生、見ててください。私の物語を。

そうしてまた出会えたら沢山たくさんお話ししましょう。

あの時と違って一緒に歩くこともできますから。

楽しみにしててくださいいね、私の先生。

番外編その1 水着について

この物語は！

ブレナパテスの決戦を終え脱出フェーズに入った直後！

アロナちゃんとプラナちゃんが奇跡を起こす為に手を取り合った結果！

アロナちゃんとプラナちゃんがフュージョンし！！

超絶超人天才美少女生徒会長のプロナちゃん（仮称）が現れ！！

プロナちゃん（仮称）（連邦生徒会長そっくり）の超人パワー！！

先生やブレナパテスの大人のカード！！

黒服のペンライトによる必死の応援！！

生徒達の神秘が合わさり！！

なんか…こう…（都合が）いい感じになった世界線である！！（その後フュージョンは解けた）

それは、こちらの世界でアロナと出会った先生を「先生」、あちらの

世界でプラナと出会った先生を「プレ先」もしくは「師」や「teacher」など先生を意味する様々な言葉で呼ぶことに決めてから数日たったある暑い日のこと。

とある教室にて行われる議論は白熱していた。

”くくくよって！アロナの黒ビキニが、プラナには白ビキニがいいと思うんだが、そちらは?!”

〈見事な理論だ、そこに至るまでどれ程の思考を重ねたのか：同じ私だからこそ称賛しよう。それでも私はプラナには黒ビキニ、アロナには白ビキニの方がよいと思う〉

”ええ!?!本当に本心から言っているのかそれ?!?!確かにそれでも似合うだろうが、しかし一番はアロ黒プラ白だろう?!”

〈認めよう。確かにアロ黒、プラ白は似合っている。だが私は今まで述べてきた、一番はプロ黒アロ白の意見を翻すつもりは断じてない

>

「もく！なんでそんなに真剣に話し合ってるんですか先生！水着の話で1時間は語り過ぎですよ！」

「……理解不能。…思考ルーチンに深刻なエラーを確認しました。これより再起動を………」

「わー!?!プラナちゃんが先生方の話のせいで頭から湯気が!?!ええと

”ナラ、クツキークリーム ニシヨウカナ”
＜アロナ ニハ ストロベリー、プラナ ニハ バニラ カ？＞
” ヨンコイリ デ チョウドイイシナ”
＜フム ワタシ ガ ハラオウ＞
” イヤ セツパン デヨクナイ？”
＜…ソレモソウダナ＞

教室に着くとアロナもプラナも暑さにやられてしまっているようであった。

いつも元気で活発なアロナは暑さに負けてぐでぐで。声も一切のやる気を感じられずふわふわ。床で寝転がっていないのが奇跡とも言える有様であった。

対してプラナはアロナと比べるといつも通りに見える。しかし長袖の制服は脱いで半袖になっており、黒のタイツも脱いでその白い足を曝け出している。背筋を伸ばしてしっかり座っているのは流石の一言だが、その顔は時折ほんやーりとしておりしっかりと暑さの影響を受けているようだった。

そんな二人に近づき、買ってきたアイスを渡して食べる。
だれていたアロナも、ぼやっとしていたプラナも、割とヤバかった

先生&プレ先もアイスによって無事に復活。

ちやんと喋れるようになってきたので、四人で喋ることにしたのだ。

そこからの話題はこの暑さについて。

アロナからのこの教室内の暑さ対策についてや、先生たちによる熱中症対策と実際になってしまった時の対処方法など。様々なことを話していた時、プラナの格好についての話になったのだ。

いつもは着込んでいるプラナの細やかなキャストオフ。

その姿にアロナがお揃いだと喜び、先生が大変興奮し、プレ先が褒め称える。そしてプラナが小さく微笑むなど平和に過ごしていたのだ。

その平和は先生の言葉によって崩れ去る。

以前から暑いのであれば水着を、アロナは「黒ビキニ」を着るべきだと主張していた先生が今回も水着を着るべきだと発言。だが前回までと違うのはプラナもいること。なので先生はプラナにも水着を、「白ビキニ」を着たらどうかと進めたのだ。

アロナはその発言を適当に流し、プラナは困惑しながらもアロナに習う。

しかしプレ先は違った。おもむろに立ち上がった。プレ先はアロナ

を「白ビキニ」、プラナを「黒ビキニ」であると主張する。

事態の急変についていけない実際に着用する2人の生徒を置いてけぼりにして、先生とプレ先の激しいレスバトルの火蓋が、今！切られたのだ!!

そして時は戻る

”くっ……！ やるじゃないか、ワタシ。その熱量は決して見逃していいものじゃあ無い。私も認めよう。ワタシの考えは賞賛に値する。”

”だが!!私は!!断固として、アロ黒プラ白である!!”

<その硬い決意と宣言。流石は私と言ったところか。もう一度賞賛させてもらおう。>

<だが、ワタシとて譲れない。アロ白プラ黒だ>

「あっ！よかった。プラナちゃんなんとか復活できたんですね！」

「…アロナ先輩？……もしや、先程までの光景は夢ではなく実際に起きていることなのですか？」

「ああ!!プラナちゃんの目が！しっかりしてくださいプラナちゃん!!先生方を正気に戻すには私だけの力では及ばないんです！プラナちゃんも手伝ってください!!」

「……………はっ。了解しました。これより先生方の理性の回復作業を行います。いきましよう、アロナ先輩。」

「はい!!いきましよう、プラナちゃん!!」

その後、先生たちはそれぞれ撃破された。

具体的には、プラナがプレ先をお父さん呼びした後、思春期の娘のように洗濯物を一緒に洗わないで欲しいと発言。プレ先は膝から崩れ落ちた。その光景を見たアロナも非常に動揺している先生に対し同じことを実行。先生は仰向けに倒れた。そうして2人が立ち直った後お説教を行い、この件は終着したのだ。

なお後日。

アロナとプラナの水着などを買いに先生たちは連行され、その現場を他の生徒たちが発見。先生たちは財布に多大なダメージを受けることになったのだが、また別のお話である。

番外編その2

お疲れプレ先生

この物語は！

プレナパテスの決戦を終え脱出フェーズに入った直後！

アロナちゃんとプラナちゃんが奇跡を起こす為に手を取り合った結果！

アロナちゃんとプラナちゃんがフュージョンし!!

超絶超人天才美少女生徒会長のプロナちゃん(仮称)が現れ!!

プロナちゃん(仮称)(連邦生徒会長そっくり)の超人パワー!!!

先生やプレナパテスの大人のカード!!!

マエストロによる必死の応援!!!

生徒達の神秘が合わさり!!!

なんか…こう…(都合が)いい感じになった世界線である!!!!(その後フュージョンは解けた)

その日、プレ先は疲れていた。とても、とても疲れていた。

キヴオトス内において耐久力がマンボウ並みに貧弱（実際のマンボウはネットで言われる程貧弱ではないらしい。作者はよく知らない）な先生と比べると幾らか高いプレ先。

かつての自身が行った所業のせいかキヴオトスの、生徒たちの事を思うと仕事を休むという選択肢が消失してしまうという難儀な性格をしている。

しかし実際の生徒たちからは、姿は違えど同じ「先生」であるし、こちらの先生と違ってパッションが控えめであるが故か、重ねてきた道のりのせいか渋い大人の雰囲気醸し出していてそれもまたアリ。何よりそうなるまで生徒の事を思っているという点でかなりの高評価。かつての決戦から思うことがないわけではないが、それを踏まえても合格。寧ろ、ゆっくり休んでほしいと考えられているのだ。

さて改めてプレ先に話を戻そう。

生徒たちとの認識の差がわりかしあり選択肢の中に休みが消失してしまうプレ先であるが、休んでいないわけではない。

かつての決戦の時のプレ先、いやプレナパテスには二つの心残りが

あった。

そう自身を責め続けている砂狼シロコ（この世界ではクロコ呼び）と再び立ち上がった時からずっと支えていてくれているA・R・N・O・A・（現在プラナちゃん）の2人の生徒の事である。

決戦終了後の脱出する段階でクロコに伝えるべき事は自身を通して何とか伝えることができたし、プラナも現在顔を合わせてから言うべき事言われるべき事を双方言い終え良好な関係を築けている。

だからこそ、基本的に生徒に優しい「先生」であるプレ先はこの2人には更に優しく、少々弱く、甘い。

クロコとのあっち向いてホイは本人が満足するまで永遠とし続けるし、プラナには無限に貢ぎ続ける。

そして2人から一緒に休もうと言われると戸惑いながらも承諾するのだ。

もう一度、大切な事なので記しておく。プレ先は疲れていた。

いつもであれば自分から休まないプレ先が自分から休み始めるほどに。

生徒たちが来ればどれだけ足音や気配を消していようと、瞬間移動

してこようと、超直感で唐突に現れようとも即座に起きて何かしらのアクションを起こすのだが、どれだけ近づいても気づかないほどに。

さて！始まりました！プレ先添い寝チャレンジ!!
実況解説は私、シャーレの先生がお送りします。

本日のプレ先添い寝チャレンジの説明から参りましょう。普段は一切自分から休まないワタシことプレ先は疲労がピークに達すると倒れる前に自分から休み始めるという習性があります。

その日晴れていれば、シャーレオフィスの屋上庭園、その中央部にある大きな木に背中を預けて。

雨が降っていれば、シャーレオフィスの休憩室、入り口から最も遠い場所に置いてある巨大なソファでゆったりとです。

そんな所で本日の天気はく（ドラムロール）……晴れ!!
雲ひとつなく、青空が見える快晴です。

よって舞台はシャーレオフィスの屋上庭園中央部の巨大な木となりました。

さあ既にプレ先は木に背中を預けて眠っているようです。誰がトップバッターにな……………

おーっとおーっ!!やはりプレ先といばこの生徒!いつたい今まで誰がこの人を支えてきたんだと言わんばかりの表情で自然とプレ先の前、即ち体の上に乗ったのはプラナだあーっ!!

そのままプレ先に背中を預けておやすみモードへ移行う!!なんと
いう素早さ、きつとチビメイド様先輩(仮称)ですら追いつかないで
しよう。

プラナが目を閉じた瞬間、出現したアレは……?まるで次元の裂け
目!そこから現れたのは……!やはり!クロコだあー!!

自分が一番では無かったことに少し不満そうですが寝ているプレ
先、プラナを確認すると安心したように顔を緩めて自身もプレ先の右
側へ。流れるような身のこなし。まるで川を流れる水のような、滑ら
かな動きです。見方によつては獲物を狙う狼の様であると言えます。

さてさて苛烈なトツプ争いは終わり1番プラナ、2番クロコです。
3番目は誰だあ?!おや、誰かエレベーターで来た様です。さあ扉が開
きます。そこある人影は一つ、少々小さく、全身からゆるつとした
オーラを出している生徒は……小鳥遊ホシノだあー!!!

エレベーターから出て、前を見たらすぐ目に入るの寝ている姿。
さあ小鳥遊選手はいつたいどうするのか?!ゆっくり音を立てない様
に、少し足早に近づき……クロコの隣へえー!!先輩はここにいるのだ
とその存在を証明する様にクロコの方へと体重を預けています。こ
れにはクロコもニッコリ。

1番プラナ、2番クロコ、3番ホシノとトップスリーが決定したと
ここで、シャーレオフィス内のカメラを確認した所、アビドス対策委員
会の面々が着々と集合しつつある様子。どうやらプレ先に用事があ
るらしく探している様です。小鳥遊ホシノ選手はそこから一足早く
見つけたんですね。おっと屋上に着きましたね。シロコがプレ先の
左側へ、アヤネとノノミでセリカを宥めながら少し休憩と称して眠る
様です。

羨ましくなってきたので、これで実況解説は終わり、私自身も混
ざってこうと思います。

それでは、本日のプレ先添い寝チャレンジ。実況解説はシャーレの
先生がお送りしました。さらば！

後日

プレ先のデスクの上の大切なもの置き場に感謝の折り鶴の隣に一
つの写真が追加された。

番外編その3 大切な確認作業

この物語は！

プレナパテスの決戦を終え脱出フェーズに入った直後！

アロナちゃんとプラナちゃんが奇跡を起こす為に手を取り合った結果！

アロナちゃんとプラナちゃんがフュージョンし!!

超絶超人天才美少女生徒会長のプロナちゃん（仮称）が現れ!!

プロナちゃん（仮称）（連邦生徒会長そっくり）の超人パワー!!!

先生やプレナパテスの大人のカード!!!

ゴルコンダ&デカルコマニーの必死の声援!!!

生徒達の神秘が合わさり!!!

なんか…こう…（都合が）いい感じになった世界線である!!!!（その後フュージョンは解けた）

プラナは自身の隣に立つ（正確には自身が隣に立った）「先生」、通称プレ先の姿をちらりと見た。

プレ先はプラナの視線に気づいた様子はなく目の前で繰り広げられているこちらの世界のプレ先、通称 ” 先生 ” と自身の先輩であり（本人に伝える気はあんまりないが）姉の様な存在であるアロナの夫婦漫才のようなやり取りを微笑ましく見守っている。

気づいていないのであれば、すこし寂しい気もするが観察を継続する。かつてとは違いプラナの補助がなくとも己の両の足で立つことができ、その目と耳は生徒たちやキヴォトスの姿、喧騒の音を拾っている。

歪んでしまった顔を隠すのと形を整える役割していた仮面は、この世界に来たと同時に顔も直ったのだから外してもいい筈なのだが、あまり外そうとしない。

本人曰く、こちらの ” 先生 ” と区別するためだと言っているが。プラナは知っている。

あれは色彩の嚮導者として立った自分を、この幸福な世界の中で忘れない様に、自身の戒めの為につけているのだと。

プラナとしてはあの時を思い出すから、あの仮面が正直好きではないのだが、仮面の下を知っているのは、現状プラナ自身とクロコ、後はこちらの ” 先生 ” くらいだろう。アロナ先輩は知らない。

思い返せば、「先生」が立ち上がった、立ち上がってしまった、あの

時。正直に言えばプラナは辛かった……のだと思う。あの頃の自分は今と比べると感情が薄かったが、それでも無いわけではない。

支えるのだと、「先生」の選択を尊重するのだと決めても、無理に無茶を重ねて無謀を絶望というコーヒーにブレンドした様な状況を思えば、当然だと思う。

そうしてふと、プレ先の手を見た。

大人にしては細い方ではあるけれど、しつかり筋肉のついていてちよつとゴツゴツした努力の手。あたたかそうなやさしい手。そして

かつて果たせなかつた約束が、心に刻まれた鋭利で残酷な冷たさが自身を襲ったのをプラナは自覚した。

喉がつかえる。うまく声が出せない。ちやんと呼吸が出来てい
る自覚はあるけれどそれでも息が、胸が苦しい。幸いあちらの ” 先

生”もアロナ先輩も自分の異常には気づいていない。なら大丈夫。修正できる。

そう思った時。
手を掴まれた。

誰にか？なんて言うまでもない。自身の隣に立つ存在はそういう者だ、と分かっているながらも異常に気付き手を握ってくれた事に安堵する。

そうして彼はポツリと呟いた。

くすこし、寒そうだったからね。大丈夫かいアロナ？>

目を見開く。いつもは意識して硬めに喋っているのを知っていたから。自分のことをそう呼んだから。

「……大丈夫です。ご迷惑をお掛けし
＜私は＞ ……?」

＜かつて約束を果たせなかった。……いや、この言い方は正しくな
いな。＞

＜約束を破った。＞

「……先生、それは……」

＜事実だよ。経緯はどうであれ、私は自分の生徒と交わした約束を
破り、悲しませてしまった。＞

＜お詫びだとか、代わりにだとか、そんな狡い事を言うつもりはな
い。＞

＜しかも、私は今から酷いことを言う。聞いてくれるかい？アロナ

＞

「了承。……先生のお言葉であればどんな事でも聞きます。」

＜ありがとう。では………＞

＜アロナ……これからも寒そうだなと思ったら、あつためる為に手
を握ってもいいかな?＞

成程、確かに酷い言葉だ。だってそれはかつての自分が言った事だ。果たせなかった約束だ。あり得ないのだと思っても、唐突にまた果たせなくなるかもしれない約束だ。怖い、怖い約束だ。こんな約束をしようとするなんて、全くなんてひどい先生だ。こう言われたら、自分の返答なんて一つだけだと決まっているじゃないか。

「…承諾。…これから、アロナの手を、…先生の、手で、あつためてください。…寒そうだと、…思った時以外も…握ってください。…、そして…、…今度は…、…けして…」

はなさないで

<…ああ、決して離さないよ。…、…、…ありがとう、アロナ>

そうしてわたしは、先生の胸の中にいた。

感じるあたたかさ。今を確かに刻んでいる心臓の音。頭頂部に感じる冷たさ。壊さない様に潰さない様に、それでも離れない様に、離さない様にしっかりと抱きしめて。泣いた。はじめて泣いた。声を抑えきれなかった。

胸の中の冷たさが完全に消えたわけではない。

それでも、このぬくもりは、そんな冷たさを優しく融かしてくれて
いるようだった。